

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2019年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	図形楽譜を用いたインクルーシブな音楽教育に関する研究
研究代表者	沼田 里衣（大阪市立大学 都市研究プラザ テニユアトラック特任准教授）
共同研究者	上野 智子（和歌山大学 教育学部 准教授） 菅 道子（和歌山大学 教育学部 教授） 山崎 由可里（和歌山大学 教育学部 教授）

研究成果

本研究は、学齢期の障害のある子どもを中心に、彼らの生涯にわたる社会参加を目的とし、多様な人々の開かれた文化活動を支援するため、図形楽譜を用いたインクルーシブな音楽活動の方法論を開発することを目的としたものである。

本年度は、一昨年度より音楽教育を専門とする研究者と共同研究として実施している、インクルーシブな音楽活動の開発に関する研究（「即興演奏を用いた障害者の社会参加に関する研究」（2017年度）、及び「コミュニティ音楽活動における図形楽譜に関する研究」（2018年度）の成果を発展させ、学会発表及び教材開発を行った。教材開発は、沼田がコミュニティ音楽の観点から、また上野、菅、山崎は学校教育における音楽教育の観点から手法を検討し、互いに議論の上、コミュニティ音楽の参加者と特殊教育学級の生徒を対象に実践を行った。

学会発表は、2019年10月に開催された日本音楽教育学会第50回大会において、『動いている音楽』：図形楽譜を用いたインクルーシブな活動の可能性—学校の内外をつなぐコミュニティ音楽活動の共同研究から—というテーマで行った。これは、沼田の音楽療法及び即興音楽研究を基盤とした「動いている音楽」という考え方を元に、本研究における共同研究として行った、学校の内外をつなぐコミュニティ音楽活動における図形楽譜を用いた活動について検討したものである。沼田は音楽社会学を中心とした理論基盤を提示し、上野、菅、山崎はその理論の音楽教育の領域における応用について検討し、上野は昨年度の共同研究による実践を取り上げ、分析、および発表を行った。これにより、図形楽譜は、目的に合わせて使用方法を様々に変えることができ、さらに演奏時には柔軟な解釈を可能とする特性を持つこと、またその特性は、障害の有無や年齢の差異に関わらず、互いの価値観を尊重し合うインクルーシブな活動に有効であると結論づけた。

教材開発については、学校教育の現場を考慮したダンスプログラム、及び図形を用いた即興演奏プログラムを考案し、上野、菅、山崎が研究上の関係を築いてきた和歌山県の複数の特別支援学級に通う小・中学生、及び沼田が研究上の関係を築いてきた阪神間で活動するコミュニティ音楽団体「おとあそび工房」のメンバーをゲストとして、総勢約30名を対象に、2019年12月6日に実践を行った。本事業は、本共同研究の始まった一昨年より継続して実践に協力いただいた和歌山県の中学校教員の意向で、昨年の発展形として実現したものであり、より多くの参加者へのプログラム提供が可能となった。また、小・中学校の教員、保護者、生徒本人から回収したアンケートより、満足度の高さが窺えるものであった。この内容は、2020年3月6日に実施予定であった2019年度テニユアトラック研究集会で成果をまとめ、臨床哲学、アートマネジメント、音楽学を専門とする研究者を交えて議論する予定であったが、新型コロナウイルスの影響による本学の自粛要請により、延期となっている。

以上より、本年度はこれまでの共同研究をまとめて学会発表を行い、さらに実践内容を発展的に展開できたという点で、実りの多い年となったと考えている。また、本年度の学会発表の内容は、学会誌投稿予定として今後の課題となっている。

<学会発表>

『動いている音楽』: 図形楽譜を用いたインクルーシブな活動の可能性—学校の内外をつなぐコミュニティ音楽活動の共同研究から— (企画代表: 沼田里衣、研究分担: 上野智子、菅道子、山崎由可里)、2019年10月19日、日本音楽教育学会第50回大会、東京藝術大学